

☆待降節第3主日(12月13日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります

第一朗読(イザヤの預言 61章 1-2a、10-11 節)

主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。
主が恵みをお与えになる年
わたしたちの神が報復される日を告知〔させるために。〕
わたしは主によって喜び楽しみ
わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。
主は救いの衣をわたしに着せ
恵みの晴れ着をまとわせてくださる。
花婿のように輝きの冠をかぶらせ
花嫁のように宝石で飾ってください。
大地が草の芽を萌えいでさせ
園が蒔かれた種を芽生えさせるように
主なる神はすべての民の前で
恵みと栄誉を芽生えさせてくださる。

第二朗読(使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 5章 16~24 節)

皆さん、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。“霊”の火を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。

あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころの

ないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。

福音朗読（ヨハネによる福音書 1章 6～8、19～28節）

神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、あなたは、どなたですか」と質問させたとき、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

随分と寒くなってまいりました。また、コロナ感染者の数も東京で一日600人を数えるほどになりました。依然として厳しい環境にあることに変わりありません。十分気をつけましょう。

さて、典礼は待降節第三主日を迎えました。聖書朗読では洗礼者聖ヨハネが登場します。洗礼者聖ヨハネは救い主であるイエスを「この人だ」と指し示す役割を担った人です。最後の預言者ともいわれます。今日の福音朗読でその姿が伝えられています。また今日の主日は「喜びの主日」とも言われています。イザヤ書では救いの訪れが告げられて、使徒パウロの手紙でも「いつも喜んでいなさい」と呼び掛けているからです。では今日の聖書朗読を喜びの心で読みましょう。

第一朗読（イザヤの預言 61章 1-2a、10-11 節）

この個所はのちにイエスが会堂で読み上げた箇所です。ルカ 4.16-21です。そこではイエスが自分はそこに述べられているように、救いを実現するために今まさにここにいると断言されています。「良い知らせ＝福音」とはどういうものかが述べられています。たとえば、「打ち砕かれた心を包み・・・」、つまり何度も何度もつらい目にあっている人を温かく両の手で包むように守ってくださるイエスの姿が目には浮かぶようです。また「救いの衣を私に着せ・・・」と述べて、イエスが貧しい人をいたわっている様子が述べられています。つまり救い主はこうして人々の間に現れるのだと。イザヤ書に続く答唱詩編では「私は神をあがめ、私の心は神の救いに喜び踊る」と、マリアが天使のお告げを受けて、エリザベトを訪問した時の「マリアの賛歌」が歌われています。これもまさに救い主がマリアの体内におられる喜びを歌ったものです。

第二朗読(使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 5章 16~24節)

新約聖書中一番初めに書かれた手紙とされています。それだけに当時の教会、信徒の皆さんの生き方が現れているといえるでしょう。主イエスはすぐにもまた来られると信じられていた時代でしたから、生き生きとした信仰が現わされています。「いつも喜んでいなさい」は、サレジオ会を創立した聖ドンボスコが好んでいた言葉でした。喜びのうちに生きることが信仰者の姿なのです。この姿には年齢制限はありません。幼い子どもも、お年を召したご老人も等しく喜べるのが「救い」なのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 1章 6~8、19~28節)

洗礼者ヨハネを福音の初めに描いています。ヨハネ福音はほかの福音と違って長い熟慮を経て書かれたようです。それだけに福音の初めに洗礼者ヨハネを登場させたのには意味があるのでしょうか。洗礼者ヨハネは最後の預言者です。なぜ最後かという預言者の使命は、救い主を指し示すことにあり、洗礼者ヨハネは「あなたたちの中には、あなたたちの知らない人が立っている」と述べて、救い主がすでに来られていると宣言したからです。当時、多くの方は洗礼者ヨハネこそが救い主ではないかと考えていたので、「自分は違う」とも宣言しています。

救い主の誕生もひっそりとおこなわれましたが、救い主イエスの宣教活動もひっそりと「知らない」中に始まったのです。実をいうとこの「知らない」中という意味には「いつもそばに」という意味が隠されているようです。私たちの目にはまだ見えないのです。わからないのです。神は私たちのそばにいつもおられるのです。気が付けば「喜びはそばにいつもあるのです。」

今日の主日で待降節の三つのローソクに灯がともりました。あと少しです。クリスマスミサは人数制限がありますが、できるところでご参加ください。ミサに来られなくてもイエス様は私たちのところに来てくださいます。どうぞ温かな心でお迎えください。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光